



## 紅葉

---

紅葉の美しい季節になりました。私のもっとも好きな季節です。

蝶々はその美しい羽根を閉じ、木にひっかかった。彼女の運命は、ここで終わった。

その醜い男は、日蔭の雑草のように、ひっそりと、そしてしぶとく生きている。そして今宵も美しい蝶々を採取しに行く。毎月一匹、蝶々を捕まえては標本にするのは男の楽しみ、いや、生きがいだ。生きがいというより、“病気”に近いだろう。

バイクで三丁目の交差点を走る午前三時美しい蝶々を探して、男はさまよいながら、バイクを飛ばす。そして、見つけた。美しく、艶やかな一匹の蝶々を。

後ろから走ってくるバイクの気配におびえて、私は少し速足になった。近づいてくるバイクの音。恐怖。そのものでした。必死にバイクの音から逃げようと、ヒールを気にする間もなく、私は後頭部に・・・

目が覚めると、気味の悪い部屋に置かれている。縛られてもいなく、ただ後頭部から血がしたたっていた。そこに、とても醜い男が入ってきて、私の頭を強くつかみ、そしてにやりと醜い顔をゆがめて笑う。男の手には何やら、硬いものを切断する時に使うものが握られている。のどの奥から悲鳴をあげそうになりましたが、悲鳴などでなかった。

次の日、地元の人々はざわめき、ひとつの遺体を見つめて、口々に何か言葉を交わしている。そこは川のそばの紅葉が美しい、地元でも人気の場所。中でも一番美しいといわれる紅葉の木。その下に転がる、すべての部分が切断されて、バラバラになった遺体。顔もつぶれ、いったいどのだれかわからない。

話は昔のことになります。この紅葉がまだ小さかった頃、相当昔ですね。それはとても美しい女性がいました。その女性はありとあらゆる男から求婚を申し込まれましたが、頑なに断りました。そのわけがわからない男たちは、ある日、彼女を捕まえ、問いただしました。すると、彼女はこう言いました。「わたくしは、あの男性が好きなのです。あなたたちのように、容姿ばかりの男は好きではありません。」あの男とは？それは、どの男にも容姿が劣る男でした。男たちは怒り狂い、その醜い男を小さな紅葉の木に背中を突き刺して、殺してしまいました。その紅葉の木は、人目につかない場所にありました。当時はだれも近づかなかった、河原の近くに。美しい女性は、その醜い男がいなくなってしまったことを大変嘆きました。毎日、男を探していました。しかし、男はなかなか見つかりません

何年たったころでしょう。女性は男を見つけました。大きく育った血のように紅い紅葉の木にぶら下がった、骨の男を。女性は絶叫しました。そして、涙を流し、「わたくしがあんなことを言わなければ...」そして、女性は帯で首を吊ったのです。

それからでした。その地域も変わり、今のようになっていくまで、男の遺体はその紅葉のしたに落ちているという事件が多発しました。調査されましたが、犯人も、殺害方法もわかりませんでした。

そして、この日。殺されたのは連続美女殺害事件の犯人である、あの醜い男性です。私が歩いていたとき近づいてき男性。嫉妬と美への劣等感が漂う、あの表情。私の好きな男性のような、あの男性。数日前、私の紅葉の木の前で、独り言を言っていましたね。「世の中理不尽だ。」「美しい女を殺すのは気持ちがいい。」ぞくぞくと、何かが走りました。私は決めました。この男性だわ、と。そして、あの夜...ぞくぞくする怒り嫉妬劣等感に満ちた恐怖の気配。嬉しさのあまりあげそうになった叫び。

私はもう人間ではありません。紅葉の木に住む鬼です。だから、醜く、心まで醜い男が大好きです。

いいえ、『だから』ではありませんね。昔からそうです。私が好きだったあの男性のような、邪悪な心と深い劣等感、そして狂おしいほどの怒りを抱いた男性が。